

通天閣 「大阪府・大阪市」

2023年9月、大阪・新世界にそびえ立つ通天閣が一年間に及ぶ改修工事を終え、装いを新たにしました。通天閣の竣工は1956年。設計者は、東京タワーをはじめ名だたる日本のタワー建築を手掛けた「塔博士」こと内藤多伸ないとうたかしゅう(1886〜1970)だ。日本で最初に耐震構造理論を確立した一人として、電波塔をはじめオフィスビルや百貨店、工場、発電所など500にのぼる建築物の構造設計を行った。

実は現在の通天閣は二代目であり、初代通天閣は戦時中の火災が原因で姿を消している。街のシンボルタワーをなんとか復興しようと尽力した地元住民の粘り強い行動力がなければ、今の新世界のきらびやかな夜はなかった。



取材協力：
 通天閣観光株式会社
 大阪公立大学 研究推進機構特別教授・観光産業戦略研究所長 橋爪紳也氏

参考文献：
 内藤多伸著『日本の耐震建築とともに』冬華社、1956
 『通天閣30年のあゆみ』通天閣観光、1987
 読売新聞大阪本社社会部編『通天閣 人と街の物語』新風書房、2002
 橋爪紳也著『大阪モダン 通天閣と新世界』NTT出版、1996
 橋爪紳也著『ニッポンの塔 タワーの都市建築史』河出書房新社、2012
 橋爪紳也監修『大阪新名所 新世界・通天閣写真帖 復刻版』創元社、2012
 橋爪紳也・田中彌壽雄・内藤多四郎 共著 『建築・都市ワークショップ(今藤啓) + 石黒知子 編』『タワー 内藤多伸と三塔物語』INAX出版 (LIXIL出版)、2006

耐震構造の第一人者、 タワー建築の巨匠

内藤多仲は1907年、造船を志して東京帝国大学に入学した。しかし、日露戦争後の造船不況から早々に建築学に転じる。製図が苦手なことから当初は建築学転向に懐疑的だった内藤だが、当時助教教授だった耐震構造の先駆者、佐野利器（とじりた）*1の「力学を基礎にした学問こそ、地震の多い日本には必要である」という言葉に確信を得て、佐野を師に建築構造学の道へと進んだ。

1912年に大学院を修了し早稲田大学教授に就任した内藤は、1917年、当時高層建築の最先端



留学から帰国した内藤多仲が自身の耐震構造理論の実践を試みた日本興業銀行本店。1923年竣工、設計は渡辺節。鉄骨鉄筋コンクリート造（現存せず）

四角形に鉄塔が組まれていたが、内藤は八角形に組んだ。「四角張らず庶民に人気と親しみを持たれるように」と、塔頂部を広げて展望台とすることでくびれを設け、東西南北にトラスを張り出し、独特のフォ



くびれた部分に張り出したトラスがデザイン上のアクセントになっている。過去には旗や鯉のぼりが付けられたことも

初代通天閣。現在の新世界の北半分にニューヨークの遊園地を模した「ルナパーク」があり、その入り口にパリの凱旋門とエッフェル塔を模した初代通天閣が建っていた



にあったアメリカに一年間留学する。シカゴやマンハッタンに建つような高層ビルを、地震大国日本でも「形が崩れず、歪まないように」設計する

にはどうすればよいか——内藤が導き出した解決策は、建築物内部の要所を壁で仕切ること

で地震に耐える「耐震壁理論」だった。船底を壁で仕切って船全体への浸水を防ぐ造船の手法と、留学先で使用していた大型トランクの間仕切りがヒントになった。

帰国後、自らの理論に基づき構造設計した日本興業銀行本店（1923竣工）や歌舞伎座（1924〜1945）が1923年の関東大震災で倒壊を免れたことで、内藤多仲の名は広く知られるようになる。ラジオ放送が始まると内藤に設計依頼が集中し、NHK愛宕山放送局鉄塔（1925竣工）をはじめ約60のラジオ塔を手掛けた。

戦後の1954年、NHKと民放のテレビアンテナを一カ所にまと

1954年竣工



中部電力 MIRAI TOWER
高さ：180m
（旧・名古屋テレビ塔）

1956年竣工



通天閣（二代目）
高さ：103m

1957年竣工



別府タワー
高さ：100m
（旧・別府テレビ塔）

1957年竣工



さっぽろテレビ塔
高さ：147m
（旧・札幌テレビ塔）

1958年竣工



東京タワー
高さ：333m

ルムを生み出した。さらに、展望台の屋根を名古屋テレビ塔のものよりも1m高く設け、当時の「日本一高い展望台」を実現。こうして1956年10月、高さ103mの二代目通天閣が誕生した。

二代目通天閣 建設の悲願

明治後期の1912年に竣工した初代通天閣（*3）は、高さ75mと当時の建築物としては日本一高く、新世界のシンボルとして親しまれた。しかし戦時下の1943年、近隣からの出火で台座が損傷し倒壊の恐れが生じると、解体され鉄材として供出され姿を消した。

戦後、街が賑わいを取り戻すと「通天閣再建」の声が挙がる。1954年3月に名古屋テレビ塔が完成すると、機運はさらに高まった。半年後の9月、地元有志が中心となり再建を目的とした新会社の創立事務所を設置。地元から出資を募り、翌1955年7月に通天閣観光株式会社（*4）がスタートした。

初代通天閣の跡地はすでに家屋が密集していた。そこで通天閣観光

めた国内初の集約電波塔として名古屋テレビ塔が完成した。設計者はやはり内藤だった。

すると、あるタワーの設計依頼が舞い込む。依頼主は、かつて大阪・新世界に存在した初代通天閣（1912〜1943）の再建をめざし、地元有志が興した通天閣観光株式会社だった。名古屋テレビ塔よりも高い展望台を、初代通天閣とも違う唯一無二のデザインを——。模倣を嫌う大阪の人々ならではのオーダーだった。

設計にあたって内藤を悩ませた問題は、高い塔の台座を建てるには狭小すぎる建設用地と、深い基礎を打つには軟弱すぎる大阪平野の地盤だった。対向一車線の市道を挟んだ四隅の土地のみが、塔脚を収めるために確保されていた。

内藤は、細い鉄材を用いることで鉄塔の軽量化を図り、基礎を深く掘らずともトラス構造の原理を駆使して高い塔を実現した。また、初代通天閣は

は、跡地の北東にあった公園の一部を大阪市から賃借し、公園内を通る市道の上に二代目通天閣を建てる案を構想。地元議員からの協力と大阪市からの理解を得て、建設用地の確保にこぎつけた。

名古屋テレビ塔を施工した竹中工務店の紹介で、設計は当代一の建築構造学者、内藤多仲に依頼した。ところが、肝心の建設資金がまだ用意できていない。地元からの出資金だけでは必要額に届かず、施工を依頼した奥村組に工事代金を立て替えてもらう形で1955年8月に着工した。



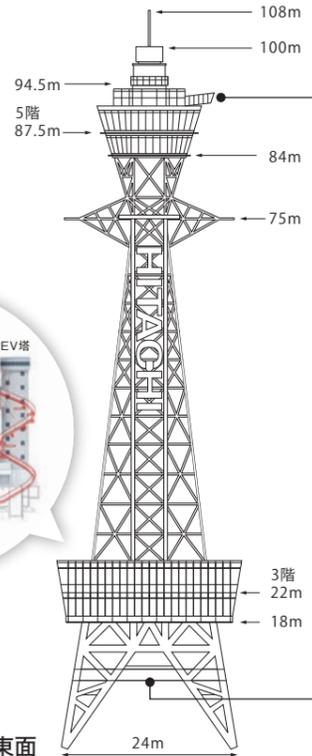
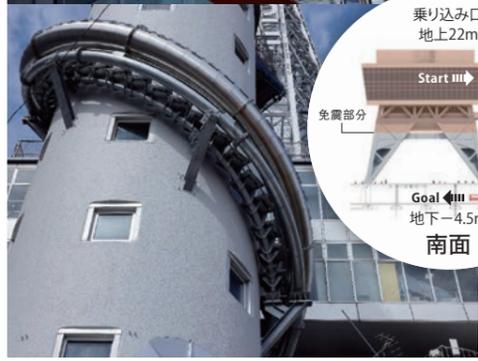
二代目通天閣の建設当時、タワークレーンはまだなかった。中央に工用の鉄塔を立て、ワイヤーを張り滑車で資材を引っ張り上げるガイデリックという起重機が使用された



市道を跨いで建つ通天閣。塔脚の間は24mとタワー建築にしては狭い。初代通天閣が近隣からの出火で被災した教訓から鉄骨をコンクリートで耐火被覆した

*3 初代通天閣は、新世界の再開発を目的に1911年、大阪財界を中心に創立された大阪土地建物株式会社を運営母体としてスタートし、のちに吉本興業合名会社の運営となった。

*1 1880年〜1956年。日本初の本格的鉄骨構造建築となった日本橋丸善書店や、東京駅などの構造設計を担当した。
*2 関東大震災当時、建設途中だった歌舞伎座は火災で内部を焼失したものの、内藤が設計した躯体は無事だった。



2022年5月にオープンし人気を博している「体感系滑り台」**「タワースライダー」**。3階の中間展望台（地上22m）からエレベーター塔の外周を1回転半し、地下1階（地上-4.5m）まで約10秒で一気に滑り降りる



2019年12月、最上部に設けられた跳ね出し展望台**「TIP THE TSUTENKAKU」**（地上92.5m）。空中浮遊しているように、よりスリリングに眺望を楽しめる



2015年の免振改修工事時に台座の天井に復刻された、初代通天閣にあった大天井画

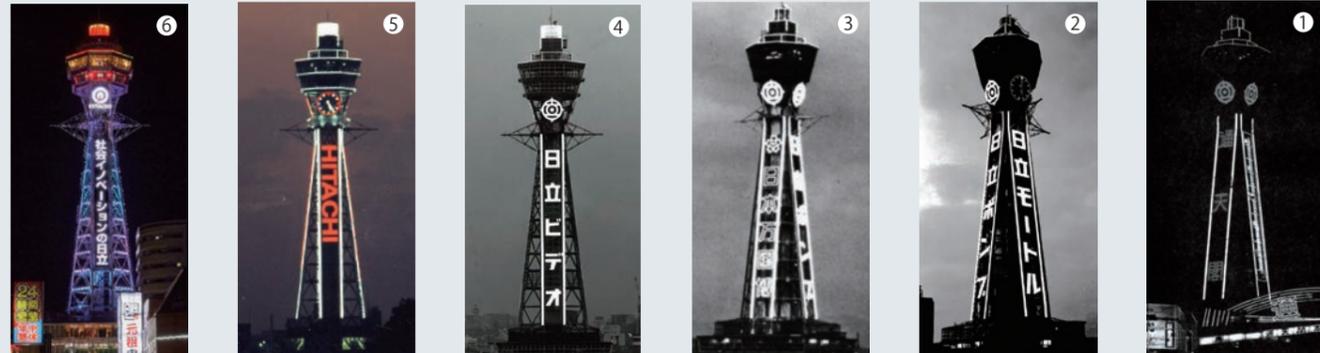


コロナ禍が明けて客足が戻り、新世界の街は活気を取り戻しつつある。中国や韓国などアジア圏からの観光客が多い

新世界の守り神「ビリケンさん」

5階「黄金の展望台」の「ビリケン」像。明治期のアメリカの女性芸術家、フローレンス・ブリッツが考案した幸福の神。かつてルナパークに祭られていたものを1980年に復刻した。当初は人気が出ず、1階入り口、2階展望台と転々とし、4階展望台に移って徐々に観光客の目に留まるようになる。現在のビリケン像は3代目。「ビリケンさん」の愛称で親しまれ、「足の裏をなでると幸福になる」と言われている。

看板広告の変遷



- ①1957年：最初の10年間、西側には巨大寒暖計が設置されていた。その後、「みんなの願い 交通安全」「なにわの安心 防火から」などの公共的なメッセージが灯った。現在の文字は「通天閣」
- ②1957年：初掲出のネオン広告「日立モートル」
- ③1967年：3年後に開催を控えた大阪万博に先立ち、「日本万国博」を点灯
- ④1979年：1970年代、オイルショックでネオン点灯の自粛が続くなか「街の活気がなくなる。一刻も早く点灯を」と地元で嘆願運動が起き、再点灯に至った
- ⑤1996年：再建後初めて塔全体の改修工事が実施された
- ⑥2023年：全面塗装でリニューアル。ネオンを全面LED化し電気消費量を従来の約60%に抑えた



新世界の東に隣接する天王寺公園より通天閣を望む

背負いながら、通天閣は今日も街のシンボルタワーであり続けている。

再建から68年目となる2023年9月、通天閣は約1年間に及ぶ改修工事を終えた。約25年ぶりに全面的な塗装工事を行い、ネオンを全面LED化。塔体の塗装には再建当時のグレーに代えてポップシルバーを採用し、日中はよりスタイリッシュに、夜間はLED照明が映え、以前よりもきらびやかになった。新世界の飲食街を見下ろす南面には大型LEDサイネージを設置し、「2025大阪・関西万博」を見据え、英語と中国語でも目立からメッセージを発信できるようにした。

現在、通天閣観光の代表取締役社長を務める高井隆光氏は「時代に応じて変化し続けることで、通天閣を後世につなげていきたい」と語る。再建当時から続く年末の風物詩「干支の引き継ぎ式」を続ける一方で、新たな集客のための仕掛けづくりに余念がない。不屈の行動力と柔軟な発想で難局を打開し、見事に通天閣再建を成し遂げた新世界の有志。飾らない鉄骨構造で塔全体を支えることにより、本質の美を突き詰めた内藤多仲。多くの人々の思いを